

第七章 炎の記憶

1

尾形玉江は特視者として別房で重扉禁処置に科せられた。ここは女子房とも隔離された監舎で、煉瓦造りの堅牢な建物であつた。独立した構築物で外から見ると一見倉庫のように見える。重い鉄扉でつぽど高窓、あとはコンクリート壁だけで明りもない。逃走常習者とみなされ、特性の戒具かいぐを装着された。

腰に鉄の鎖が巻きつき、その鎖の先には重い鉄丸が二つ付いていた。歩くと鉄丸の重さを引きずらねばならなかつた。あわせて、減食罰、運動の禁止の罰が加えられた。一週間の重扉禁むゆういきんである。

一日に三度、看守が外から声を掛ける。

もつとも、雑役係の特警隊員だから、その男も同じ受刑者一人であつた。

食事の差し入れ時に、鉄の戒具は一時外され、隣接地の便所で用を足した。

便所は首から上が見える簡易式のもので、特警隊員の男が外で見張りをしていた。

男の話だと、女でこのような思い処分を受けたのは開所以来のことで、玉江は北神拘置所ではかなり有名な存在になつていた。

「な、おれは口説かれてもあんたには手を出さんで。おまえ、やりながら男を殺すのが得意なんやて。わしは三分の一の減刑でな、あと十日もすれば娑婆に出られるんや。いま外は男ひでりで、銃後の女はみんな飢えて待つてるいう話や。く」

四十半ばの痩せ細った男は、野卑た笑いを残した。

だが、この拘置所内の情報は、このおしゃべりの男のせいでいくつか耳にすることができた。

一つは軍事機密とされていたが、北神拘置所は、PW捕虜収容所施設が新たに設けられていた。

米軍捕虜が北側の監舎におよそ七十名は収容されているという。神戸市北部の自然林での伐採作業を、彼らは課されていた。玉江の歩行を困難にしている鉄の戒具は作業中の米軍捕虜には装着されていて、たまたま玉江の戒具を見た男が口をすべらせたのだった。

常時、兵隊が警護についていて、怪しい動きがあった時には容赦なく発砲するという。

もう一つの情報は刑務所・拘置所も空襲を受ける危険性が大なので、受刑者全員を他の安全な施設に避難させる準備ができていたというものだった。

現に、この時期までに受刑施設の戦争による被害は相次いでいてトラック島図南報国隊 横浜刑務所構外作業所の被爆、沖縄本土決戦による沖縄刑務所・平良刑務支所の被害も甚大なものであった。

沖縄刑務所では短期刑以外の受刑者は十九年十一月に熊本刑務所に移送されている。

昭和二十年四月十二日、東京拘置所の刑場の一部焼失、同日浦和刑務支土所前橋は焼夷弾により施設の大部分を失い逃走被告一名を出す。

一月程前の三月十九日には名古屋刑務所が被弾全焼、収容者が一名死亡した。

日本列島の至る所の刑務所・拘置所が被害を受けた記録がいまも残されている。

すでに食糧事情も悪化していた。

この時期、刑務所・拘置所内では栄養失調による死者も数多く出ていた。朝一昼一晚とも木椀に菜っ葉入りのれも大豆かす、マイロ粉と呼ばれた、稗ひえの加工物などが混入されたひどいものであった。

減食中の玉江だったが、それでも刑務所の食事は三

度きまつた時間に支給されるだけ恵まれていた。

やはり獄中で考えることは、生野の廃坑内に一人残して来た一ノ瀬圭吾のことだった。

この北神拘置所に連れもどされて八日目、いちばん彼のがことが気になった。あの不自由な体でどうやって生きて行くのか。いや、熱病の容態が悪化しすでに彼は息絶えているのかも知れなかった。

置いてきた食糧は鶏の生肉を燥製にしたものと、芋づるの乾燥したもの、そされに種芋の八ツ頭が二個だけである。食いつなぐとしてもせいぜい十日であつた。

この獄舎から再び脱走しない限り、圭吾を救ける方法はなかった。

が、特視者の扱いを受けている、いま、脱走を試みる手立てはない。玉江は房内作業を申し出た。

未決囚はまだ刑が確定していないので本来なら作業労役は課せられないのだが、戦時特例として、構内外の労役がこの時期励行されていた。

食糧確保のため自給自足体制がとられており、構内の空いている場所では菜っ葉や根菜類が作られていた。むだめし食いは国賊に等しいわけだから、受刑者も報国隊の一員に加えられていたのだ。

この北神拘置所に収監されている女囚は、現在、尾形玉江一人だけだった。

それで、男子房に、尾形玉枝は収容された。

他の女子受刑者は和歌山女子刑務所に移監されていたのである。尾形玉江に関しては戦時重要犯罪人とみなされ、緊急の取調べ、公判スケジュールが組まれていた。ために、所轄署、裁判所などの都合から、この北神拘置所にとどめおかれていたのであつた。

ハトロシ封筒貼りの手作業がやつと許可された。拘置所内には作業所があり、この封筒作りの仕事のほかに木工、被服、皮革の小規模工場が稼働していた。懲罰房の担当看守はいつも腰に日本刀をぶら下げていた。これがこの男の自慢で、日本刀は刑期十二年の元鍛冶

工の男が、ここの拘置所で作りあげたものであった。「重要犯はなにかあれば、一刀のもとに斬り捨ててもいいことになっておる」

副看守長の役分にある四十男は武士もののふの一人になつたようなことを言い、ことあるごとに白刃を抜いてみせた。「獄窓に響ぐ槌音、織悔の魂を打ち込む日本刀」こんな見出しのある新聞記事も、この男は、玉江に見せつけた。刑務美談の一つに、この話は、仕上げられていたのであった。

ハトロン紙の封筒貼りをするために、型どりされたハトロン紙の束と、糊のびん、糊付けするときの道具の薄い竹製のへらが、房内に持ち込まれた。

もう一つ、作業台として木製のアイロン台が用意された。まったく単調な作業だった。

が、玉江はやはり脱出する方法について頭を巡らせていた。懲罰房から独居房に玉江は移された。

糊付け用の竹べらを見た時、また合鍵ができるのではないかと思つた。だがもはや前回のようにはいかなかった。手元には硝子片もなかった。流し台の下に隠したあのひごも、粘土も手には入らない。ハトロン紙に糊だけでは手の打ちようがなかった。

一日目が終つた。

担当看守がその日の出来上り品を受け取りに来た。毎日の作業になるので、木製の作業台は房内に残して行つた。玉江はこの作業台に目を付けた。

低い卓台の表面には杉板が打ちつけてあった。

四本の脚がしっかりと、台を支えている。看守の去つたあととすぐさま、作業台を裏返しにしてみた。

急造の作業台で、四本の脚のうち一本だけは堅いけやきであつた。玉江は木地師の娘である。

それが何の木であるかは一眼でわかつた。それぞれの脚は釘で打ちつけてある。柔らかな材質の杉材の脚を引っ張り、揺すつてみたら脚がぐらぐらしてきた。

少し力を込めると脚は抜けた。

が、ケヤキ材の脚だけは引き抜くのに時間を要した。木目の詰まった堅い材質に深く二寸五分の釘が食い込んでいた。杉板の台には全面にハトロン紙が貼つてある。ケヤキ材の脚を引き抜くのに十数分もかかった。

四本の釘は作業台から突き出している。台を貫いている釘の一本を、逆のほうから叩き上げ抜き取った。鍵を開けるのにこの釘が役立つのではないかと考えた。鍵穴を探してみる。

錠前はこの前の三〇三号房と同じものだった。どのあたりが共腹部分なのかはわかつていた。

が、まっすぐの釘である。弾機のアたりを探してみたがまるで心許なかった。何の手応えもない。

今度はケヤキ材で釘の腰を曲げ、折れ釘のかたちにして、開錠に努めた。やはり、何の手応えもなかった。

間もなく就寝時間だった。看守のやって来る時間である。規律は以前にくらべると厳しく、巡回の回数も増えていた。解体した作業台は元通りにした。

壁際にもどす。就寝時間が房外から告げられる。

寒いので壁際に寄り糞虫(みのむし)のように掛布団で身をくるんで寝た。

また一ノ瀬圭吾のことが気になっていた。

“わたしは病人を捨てて逃げた不実な女だと思われているのではないだろうか。裏切られたと思えば彼は絶望のあまり……”初めて廃坑で発見した時のあの弱々しい圭吾の泣声が甦った。

彼はとてもものごと、一人では生きて行けない。

もしかしたら……ふと玉江はあらぬことを考えた。そんな思いをしたせい、か、玉江は夜半に不吉な夢を見た。はじめはよくわからなかったが、どうやらあの山の湯泉にいたようだった。玉江と圭吾が初めて男と女の契りを結んだ場所である。玉江のしていることといえば、おどろおどろしいことであつた。

それが勝の肉体なのか、圭吾の肉体なのかよくはわかっていなかった。とても冷たい死人の体を玉江は両手で支

え持っていた。あたたかな湯泉を浴びさせてやると死体にはあたたかな血が通うとも思っているのかも知れなかった。

が、いつまで待っても、男の体はあたたかくはならなかった。玉江の体が冷えて行くばかりで、急に、このまま、自分も死ぬのだと思つた……。

と、その時、玉江は恐ろしい情景を眼にしていた。

あの鬱蒼としたサルオガセの繁茂の薄闇に何人かの死人の相を見たのであつた。

淡黄色の蜘蛛の糸に何重にもからめとられた杉の梢はもはや樹の実相を持ぢてはいなかった。

亡霊たちのそこは棲家で、蛛の巣の張った荒屋あばらやとも見えた。たしかに、細い枝の一つに、首に縄をかけた圭吾の顔があつた。それだけではない。

圭吾の口から聞いた菅原二等兵の縊死体もぶわぶわと風に吹かれていた……。それが菅原二等兵なのかどうか、定かではなかったが、玉江の夢の中の意識はそう識別していた。

体中がぞおつとし、その時、玉江は何かを叫んだ。

眼醒めようとしているのになおもそのサルオガセの漠（ぼ）うばくとした薄闇の世界のほうに、惹き寄せられて行く……。やつと自分の呻き声に呼び醒まされ、現実の世界にもどされていた。びつしより汗をかいていた。

前夜の薄気味の悪い夢見のせい、翌日は、一日中頭が、ぼおーとしていた。

だが、余計に圭吾のことが気になり、どうしても、ここから逃げようとさらに決意を固くした。

玉江はケヤキの脚材と二寸五分の釘で錐きりを作ることを考えた。

玉江がいない間に監房の鉄扉は大部分が木製のものに代えられていた。鉄材は供出され、兵器製造の一助とされたのである。鍵を開けることが、到底不可能なので、錠前の取付金具を壊すことを玉江は考えた。

長方形の錠前金具には十二本の釘が打つてあつた。

しっかりと打ちつけてあるので、一本一本の釘を抜くには、尋常の手段ではかなわなかった。房内の洗面台の蛇口を先日直したばかりであることを思い出す。

パッキングがすり減っていたので、看守が六角スパナで、蛇口の頭の部分を外し新しいのと取り替えたのだ。

看守は、その時、蛇口を手指で元通りに締めた。おつつけ、その場で、玉江は洗面台に行き、蛇口の首を試しに捻ってみた。びくともしない。それでケヤキ材の角で、その頭を叩き少しずつ緩めた。すると、その首がとれた。金槌の代りにしようと思った。独房に戻ってから、ケヤキ材の上部に、斜め加減に、手元に用意してある釘を打ちつけてみた。横から釘の出ている不恰好さだったが、錐に似た小道具ができた。

この小道具で錠前部分の金具の縁に、穴を開けていった。木の部分なので釘が立った。一晩中、性懲りようこりもなく、玉江は穴を穿つがことに専念した。夜が白々と明け始める。

縦十二センチ、横も七センチの長方形の扉の金具だから、周囲は三十八センチあることになる。

一晩かかつて、やっと七センチの下辺に十ばかりの穴を開けただけだった。木屑は拾い集め、便槽に捨てた。

拘置所の朝は早い。

起床六時三十分前になるとすでに仮就寝の看守も眼を醒ます。一日の日課表を作ったあとは、朝の点呼、体操、食事番への指示と忙しくなる。

五時三十分が看守の起床時間である。

それからの数日、ハトロン封筒作りの合間に、看守の眼を盗み、金具の際きわにいくつかの穴を開けた。

糊に木屑を混ぜ、開けた穴に塗り込んでカモフラージュした。玉江は金具を取り外す気でいた。

鍵穴内部には一枚の押さえ金具があり、その向うに共腹部分の弾機が内蔵されている。錠前の金具を外せば、鍵穴内部が裸の状態になるはずだった。

もちろん、独房から一步出れるだけで、完全には外

には出れない。

前回同様、独居房棟にはもう一カ所中扉がある。

その外にはあの赤煉瓦塀も控えていた。

ともかく、この独居房を出ることが先決だと玉江は考えていたのだ。

兇器になるケヤキ材だつて手元にある。夜間の警備が手薄な時に、強行手段に訴えれば、脱獄の道は開けるかも知れないと考えた。

たとえば、中扉の陰に潜み、看守が一人で入ってきた時に背後からケヤキ材で一撃を加えれば…。

いや、首を締めることだつてできると、玉江は大胆なことを考えていたのだ。

2

午前七時三十分。作業開始を待っていたら二名の看守がやってきた。

「おい、一二二号、本日は検察庁送りになる。房を出なさい」

玉江は作業台の仕掛けのことが気になった。

あと二日あれば、錠の取付け金具は外すことができる。玉江は自信があつた。

玉江は一瞬、二人の看守の顔を見た。

その場に立ちつくす。

「あの、どこかに移送されるのですか。今日は…」

「取調べがある、お前のようなのは早いことお裁きを受けんとな。また逃げられたらどもならんやろ」

両手錠が噛まされ腰縄が打たれた。南門まで連れて行かれ、送致手続きが終ると、顔からすっぽり布で作られた袋状のものをかぶされた。

木炭バスに乗せられる。玉江には見えなかったが、バスの後方にあるガス発生炉に数人の男たちがとりついていた。木炭を入れ、火起し扇風機である。それからやつとエンジンが始動する仕掛けであつた。

北神拘置所から裁判所までは、およそ、車で二十分あまり、楠公なんこうさんで知られる湊川神社を越し、国鉄の神戸駅に至る道筋に赤煉瓦建築の古風な裁判所はあった。

検事の取調べは簡単なもので、特に、出生について、不明の点があるというので、その点を質された。

昭和九年三月十三日が、義父根岸豊吉の死亡日となっていた。玉江の母、はるの死亡届が村役場にあり、その戸籍から玉江の身許が確認された。認知されていないので、玉江の父の名はわからなかった。私生児であった。母は三十一歳で幼子を残して死んでいた。

すでにその年齢に近い齢に玉江もなっていた。

菅家吉蔵の殺害については物的状況証拠ともはつきりしているので、共犯の花房栄一との関係など二、三の質問を受けたにとどまった。

午後、北神拘置所にもどされた時、逃走準備の状況が発覚していた。典獄室にいきなり連行される。

証拠品のハトロン紙貼りの作業台がデスクの上においてあった。裏返しにされ、三本脚の状態にされて錐の役目をしたケヤキ材の脚だけが、一本、わざとらしく取り外されておかれていた。

典獄拘置所長の男は白眼の部分が多く、気味の悪い眼付きをしていた。下からすくいとりよう眼差しを向けている。眼に怒りの色が含まれていて、それだけで恫喝ぞうかつ方があった。

「この非常時下、われわれは銃後の戦士としてここを戦場のつもりで日々戦っておる。一件の逃走はわれわれの百の功績をないがしろにする。貴様はわれわれ刑務官に挑戦しておるのか。ここが戦地なら貴様はこの場で銃殺だ。いいか、いまは食糧事情も悪い。貴様のような非国民の最たる者に当拘置所はむだめしを食わせるわけにはいかん。重屏禁の上、食事は一日一回、たとえそれで栄養失調になって死んだところで、われわれの関知するところではない。逃げようたって一歩も歩けんよ

うにしてやるからそう思え」

肩を怒らせ眼を吊り上げている。小細工がばれていて。典獄は玉江を睨み据えた。あっちへ行けとばかり、顎をしゃくる。最悪の事態になっていた。

二度目の重屏禁処置を申し渡され、玉江は暗室そつくりの独立棟に監禁された。脚部への鉄戒具だけでなく、両手錠の上、腕にも鉄鎖が巻き付けられた。

一日一度の食事は大根の葉が入った雑炊が一杯だけだった。厳重な警備体制がとられていた。なによりも空腹に耐えかねた。

三月に入っているのに底冷えのする日が続いていた。

この頃、玉江は体に変調を来たしていた。

まず自分の体の匂いが嫌いになっていた。

胸がむかつき吐いた。

苦しい思いだけで胃の内容物を吐くことはなかった。

衣服についたシラミが生血を吸うので、全身が痒くて仕方がなかった。痒いところを搔くにも両手錠ではどうしようもない。これもちよとした生地獄だった。

玉江は絶体絶命の状況に追い込まれていた。

思いは圭吾のもとにあったが、焦りが禍いし、かえって自分を不利な状況においていた。圭吾は元気をとりもどし、少しずつ自分自身で生きる方法を身につけつつあるに違いないと考えるようにした。

廃坑の中が今はいちばん安全な場所であることは圭吾がいちばんよく知っているはずだった。

二日が経ち、三日が過ぎた。

その間、空襲警報の発令が二度あった。

三月九日、十日の両日にわたって帝都大空襲があり、東京には夜間大焼夷弾攻撃が加えられ大きな被害が出ていた。

二月二十五日に続く大規模爆撃であった。

続いて三月十一、十二日、名古屋が大空襲の被害を受け、三月十四、十五日は敵の目標地は西へと下り、大阪・尼ヶ崎などに攻撃が加えられ死傷者一万三

千人余が出た。

三月十七日。

この日は朝から風が強かった。

六甲風おろしの、つむじ風である。南から吹き寄せてきた春一番の台湾坊主が、山の背面にぶつかり、巻き込むようにして強風を地上にと叩きつけてきた。

この季節特有の春あらしであった。

煉瓦積みの監禁舎の中でも、ひゅうひゅうと鳴るその風音は聞きとれた。両手錠は外されていたが、すでに玉江は逃げる氣力を失いつつあった。

生野銀山廃坑跡をあとにしてからほぼ二週間が経過していた。この間の難行苦行のせいか、玉江の月もののはなかった。はじめての経験だった。

拘禁性無月経症の例は冷え込むコンクリート部屋暮らしではよくあることだったが、頑健な体の玉江とはこれまで縁のないことだった。

精神的にも追い詰められ、一種の拘禁ノイローゼの兆候も顕われていた。夜中に誰れかの足音が聞えてきて、いつもぴたりと扉の前で止まった。

入れるはずはないのに、暗い壁際にふーと男の影が立ったりした。幻覚が生じていたのだ。

不思議と自分と関係のある男たちの姿は現われなかった。自分ではない自分が、暗い闇の中に閉じ込められていて、夢うつつの世界をさまよっているかのようだった。

この夜、午前二時三分、空襲警報が神戸市全域に発令された。B29の編隊六十機が、紀伊水道沖合いより機首を西北に向けた。

防空対策緊急指令がすでに出されていた。

『行刑非常警備規程』により、敵機が上空に飛来した時は、収容者並びに刑務職員は待避するよう指導されていた。

『刑務所防空要綱』の一部を示すと、

一、空襲ノ公算大ナル重要都市ニ於ケル治安ノ維持

ヲ図ルタメニ収者中危険犯人其ノ他老弱者等ハ移送
上申ヲ為スコト一、防空実施ニ関スル要務ノ補助ニ就カ
シムル為受者中ヨリ適當數ノ防空要員ヲ指定スルコト
一、受刑者防空要員ハ防空出動ニ便利ナル居房ニ拘
禁シ之ヲ標示スルコト一、空襲ニ際シテハ特ニ収容者ノ
拘禁確保ト所内ノ秩序維持ニ主力ヲ注ギ被害及ビ
防空戦闘ノ状況等支障ナキ限リ収容者ニ告知シ衆
情ノ安定ヲ図ルト共ニ流言飛語ノ防遏ぼうあつ下
群集心理ノ善導ニ努ムルコト

一、爆破ニヨル危険ガ及ブ事態アルトキハ舎房外ニ避難セ
シムルコト

一、局部開扉女子、老弱者ヨリ順次開扉シ収容者ヲ
構内ノ予定地ニ誘導避難セシメ戒護ヲ嚴ニスルコト
一、全部開扉収容者ノ安全期シ難キトキ、全舎房ヲ開
扉シ構内ノ予定セル場所ニ分集、避難セシメ緊急時ハ
レヲ解放スルコト

一、構外避難ニ際シテハ必要ニ応ジ戒具ヲ使用シ拳銃
又ハ騎銃ヲ携帯戒護ヲ嚴ニスルコト

など細部にわたる規程が用意されていた。戦時下の
緊急事態発生を考慮した上の行刑対策であつた。

午前二時五分先導のB29が一機、神戸市上空に
飛来、照明弾を神戸市西部一帯に投下した。

折りからの風にのり、紙様の反射板が無数地上に
落下し、舞つた。青白い光の海にされた地上は、この時
、真昼のような明るさに変えられた。

洋上に待機していた編隊はまず、海岸通りに焼夷
弾を落し、それから山の手に東西に沿つて弾雨を降ら
せた。明らかに無差別爆撃で細長い神戸の地形を考
慮に入れた上での爆撃であつた。

さらに、この時、林田区、葺合（ふきあい）区の東と西に
火の柱を立てるために多量の焼夷弾を落した。

つまり、海と山側の南北、そして東西に「火の屏風」を
立てることで避難者の退路を断つたのであつた。

その真ん中に位置する兵庫区、湊東区、それに神戸区は完全に四囲を火に囲まれた。

北神拘置所は兵庫区菊水町にあった。北の山裾野にあつたので南側に立った火の柱が寄せて来た。海側の街はすでに燃え盛り、夜空が真つ赤に染められた。

B29の爆音が重屏禁舎の玉江の耳にも聞えていた。人の声が甲高くなり、刑務官や特警隊員たちが右往左往しているのがわかった。

非常事態を報せるサイレンが鳴りつ放しで、この緊急の状況を構内に伝えた。

3

この夜、北神拘置所では『行刑非常警備規定』にのっとり、午前二時二十七分に、収容者の解放を決定した。すでに隣接地の荒田町、上沢通、大開通、上橋通などは火の海、湊川公園周辺、新開地の繁華街も焼夷弾攻撃にさらされようとしていた。

海岸寄りの火は夜空すでに赤く爆じていた。炎の立つ様が夜空に映じている。煙霧が中空に立ちこもっていた。火勢は強く、風に煽られて炎はのた打っている。勢い立つ生きた火になっていた。

流れ弾の焼夷弾が一発、拘置所内の倉庫に落ち、めらめらと火の手が上った。

収容者二百五十六名、うち女囚一名というのがこの時の拘置所の拘禁者実数であつた。

典獄は沈痛な表情で、刑務職員、特警隊員に最後の訓令を下した。

「非常事態である。収容者二百五十六名中、重罪被告人十名を除き全員を解放する。なお、看守長一名に特警隊員五名、副看守長一名に特警隊員五名の合計十二名を決死隊員として重罪犯者の警護、並びにPW警備の任に当らせる」

あわせて典獄は、この非常時の最高責任者として拘

置所内にとどまり、陣頭指揮をすることが告げられた。解放は殺人による逮捕者を除き、自発的復監を条件に戦時特例として実施された。

PW捕虜収容所の特別警備のために一班が向けられ、陸軍警備隊の傘下に入ることになった。

尾形玉江は、重罪犯被告人として、空襲下の拘置所内に残置されることになった。

重屏禁舎の暗い房から出され、構内の特別防空壕に軽便手錠着用の上、連れて行かれた。

南門隅の赤煉瓦塀の近くに、縦長の緊急避難用の防空壕が設置されていた。

内部は粗いコンクリート壁で、一カ所だけの出入口は施錠可能の木の扉が申し訳程度に付いていた。

重罪者が次々とこの避難壕に集結して来る。

何人目かの男は義手をしていた。花房栄一の姿を逮捕されて以来はじめて玉江は眼にした。

背を丸めた姿はいかにも弱々しい。

花房は壕の奥の方をすかし見た。玉江からは見えだが、彼には玉江の姿は見えていないようであった。玉江も声を掛けたりはしなかった。

「むしろここで焼き殺されるで。どうせ丸焼きになつてもええような奴ばかり集めくさつたんやろけどな」

「焼夷弾でもな、こんなちやちな防空壕の屋根は貫通しよる。一発来ただけで全員即死いうことになるで。これは」

男の重罪者たちが声高に話した。

解放のために受刑者たちを誘導している刑務官と決死隊の六名の警備員、いかにも警備体制は手薄であった。しかも火勢は募つて、拘置所近くの民家にまで火は迫っていた。ぱちぱちと火の粉が爆ぜる音まで聞えている。この混乱状態を利用して逃げぬ術ではなかった。

玉江はすでに逃げる決心をしていた。

が、防空壕の入口では豪の者で鳴る看守長が特別携帯を許された短銃を手に、壕の中の重罪犯者を見張

つていた。

まだ全員收容されていないので、特警隊員は各所に散つており、看守長のそばには一名の特警隊員が付いているだけだった。

まだ、防空壕の扉も閉められていない。

特警隊員は扉口を固めていた。空を見上げて仁王立ちしている看守長とは五、六メートル離れていた。

囚人の一人が、特警隊員に語りかける。

「おい、お前もここで死ぬ気か。あほらしいことやで。な、手錠しとらんのはお前だけや。わしらを、なんとかしてくれや。どや、いまは死ぬか生きるかや。お前かて親の顔は見たいろ。そんなとこに立つてたら、お前も確実に死ぬで」

花房栄一を入れて男は四人いた。

と、その時、地上の入口辺に立つていた看守長の眼前に、焼夷弾が一発落ちた。とつぜんのことであつた。

「ほれえ来たあつ」

「殺されるで！」

一瞬、入口あたりがぱーっと明るくなつた。火の海になつている。防空壕の入口までは階段になつていた。

階段下の扉口にいた特警隊員がまず真先に逃げ出していた。壕の中にいた全員が扉口に殺到していた。

無我夢中で玉江も表に飛び出していた。

看守長の男は倒れていて、その着衣には火が付いていた。焼夷弾はすぐ近くの防火槽の縁に当り、火の油をあたりにまき散らしていたのであつた。

看守長が腰にしていた鍵束を一人の男が奪つた。

居合わせた者たちが順繰りに合鍵で手錠を外す。初めて花房栄一が玉江に気付き声を掛けて来た。

「この風や、西へ逃げたら火に巻かれるで。北や、北へ逃げるのや」

南門から脱出する。ひゅうひゅうと風が鳴り、遠くの空では火のつむじ風が舞っていた。

だが、玉江は北ではなく南を目指した。

“花隈”の庭園内の土中には、土の壺に入った彼女の全

財産が隠してあった。

金さえあれば……。生野の廃坑で玉江の帰りを待っている一ノ瀬圭吾のことが思われた。

「あかん、そちやないて！」

花房が必死で叫んだが、玉江は聞く耳を持たなかった。民家が密集している小路に入り込んでいた。

まだこのあたりには火は回っていないが、行く手はすでに火の海だった。

玉江を連れもどすつもりで花房は後を追いかけた。小路を曲がり三つ四つ曲がると、公設市場のある場所から急な下りの坂道になる。

商店街が左右に並んでいた。被災者が続々と山の方角目指して登ってくるので人の群れでぐった返していた。家財道具を肩にしている者もいるので、狭いが余計のこゝと歩行困難になっていた。

人の流れに逆行して走る玉江と花房だけが防空頭布をかぶっていなかった。やっと花房が追い付く。

「あかん、死にに行くようなものや」

「ほつといて、うちほうちや」

花房の忠告がわずらわしかった。

いまさら、道行きの二人でもない。

湊川トンネルの際まで来た時、花房は玉江の手をとりトンネル内に避難するよう言った。トンネルは長さ約七十メートル、高さは三階建てビルほどもある。

すでに人が群れていてトンネル内には負傷者もいた。

救急避難所なのか医務班がここにはいた。

ここから“花隈”まではなお十二、三分の距離があった。市電通りを突っ切り、新開地筋に通ずる坂道を玉江は駆け上っていた。

なおも、花房は不自由な義手を揺すらしながらついて来る。まだ玉江の肉体に未練があるのだろうか。

それとも一人で生きて行く自信がないのか。

新開地の本通りに出た時、しゅしゅじゅと風を切る連続音が頭上でした。雨音を思わせる耳障りな音だっ

た。新開地の通りはまだ火が回っていないかった。

湊川温泉も、通り中央辺の松竹座、それに東京帝国劇場を摸して造られた聚楽館むうらくかんも赤い火にはまだ包まれていなかった。

が、この時、一瞬のうちにこの繁華街にも焼夷弾がまかれていた。眼の前が橙黄色の燐火の壁になっていた。ぱつと、行く手の視野に火が点ぜられた。

「あかん！死ぬでえ！」

花房が玉江の肩先を掴み、手前に引き寄せた。

その手を玉江が振りほどく。その拍子に花房が前につんのめった。しゅるつと耳近くで鋭い音がした。

「うそ」

前倒しになった花房の後頭部を焼夷弾が直撃していた。一瞬玉江は振り向いたが、玉江が見たのは背中に転じた火だけだった。もう火に包まれていた。

玉江の背にも火が飛び散っていた。

ちりちりと髪の毛焦げる匂いがした。

咄嗟に、玉江は火の付いた上着を捨てた。

新開地通りは両側がすでに火の壁になっていた。ここを抜けるには焦熱のトンネル道を、死を覚悟ですすむしかなかった。玉江は足が疎んだ。危険を感じ、松竹座のコンクリート造りの建物内に逃げ込むことを考えた。

だが、すでに中に火が入ることをおそれてか、扉は固く閉ざされていた。のちの記録によれば、この時、映画館の地下室や、神港新聞社のビル内には避難させられた福原の遊女たちが多勢いたという。

ほかにも妓楼の地下の特別室に多くの女たちが閉じ込められていた。玉江が扉を叩いたあとになお火勢が募り、大部分の女たちはこの時、蒸し焼きにされ死んだ。

玉江とて同じ運命にあったのだ。

身請けの話がなければ、この時、玉江も地下の一室に閉じ込められ、戦火に焼かれて死んでいたのかも知れなかったのだ。

玉江はさらに走り続けたが、到底これ以上、火の海

の中に身を投じることではできなかった。

途中、沢山の焼死体を見た。まだ体から火を放っている者いた。いつの間にか、誰れかの防空頭巾を頭にしていた。折り重なった死体の一つから背に負ったリュクサックを外す。防火槽にとび込み全身を水に浸す。

“花隈”まで行くのはあきらめた。

湊川トンネルまでもどろうと考えた。狭い横路を抜ける。街路樹が枯木のように勢いよく燃えていた。

とつぜん、玉江の目の前に正体不明のものが飛び出して来た。大きな馬面が現われ、凄まじい鼻息を浴びせられた。馬車馬で、まだ荷車を引つ張ったままだった。

すんでのことに、礫き殺されるところだった。

荷台を引きずった馬はすっかり動転し、丁字路の石壁に激突した。ニメートル先の出来事で、寸秒のちがいで、玉江は死ぬところであった。

脚でも折ったのか、前倒しになった馬が起き上ろうとしてもがいていた。荷車の轆ながえが邪魔になり馬は自力では立ち上ることはできずにいた。

やつとの思いで玉江はこの場をすり抜けた。

ごおつと、空のどこかで火のつむじ風が舞う音がした。天空を火の雲が走っていたのである。

三月十七日の空襲で、死者二千五百九十八人、負傷者八千五百五十八人、家屋の焼失六万四千六百戸、罹災者二十二万六千人という大きな被害が出た。世にいう“神戸大空襲”の惨劇の様であった。

尾形玉江は着のみ着のままだったが救かった。だが脱走囚であることには変りはなかった。

一般の罹災者が神有電鉄の湊川駅構内のトンネル内で一夜を過ごしているうちに、一人、レール道を辿り北と歩き始めた。拾ったリュクサックの中には非常食の妙り米と大豆、それに現金が五十八円入っていた。

壮年者のほば一カ月分の俸給の額である。

席亭花隈まで戻ることを考えたが危険だった。

それに顔見知りの誰れかに会うことだつて考えられる。神有電鉄の沿線は山間部を縫っているので空襲の被害をほとんど受けていなかった。

玉江は始発電車が定刻どおり出るのではないかと、途中駅で待った。始発駅だと刑務職員による検束が行なわれるのではないかと踏んだのである。鈴蘭台駅まで線路伝いに二時間ほど歩いた。午前七時四十五分、だいぶ遅れたが始発電車が鈴蘭台駅に到着した。

車内は罹災者ですでに満員であつた。

事実、この日の朝、北神拘置所では改札口の検問に刑務官を派遣していた。戦時解放二百四十六名、ほかに重罪者の逃亡六名、定刻復監百九十二名、未帰還者五十九名の記録が残されている。

また、米軍捕虜を収容していたことが幸いし、一部流れ弾程度の被弾はしたもの、北神拘置所は焼夷弾攻撃の直接対象とはならなかった。

アメリカ軍の情報網は捕虜収容所の所在を的確に掴んでいたのである。従つて、所在地周辺の民家も大部分は焼けることなく残つた。

また、このちも刑務所の戦時解放は行なわれ、二十三年三月二十五日、沖縄刑務所は解放状態のまま集団逃避をし、糸満市で沖縄戦の最後を迎えた。

ほかに岐阜刑務所の鷹見刑務支所が七月十日に、堺刑務所が同じく七月十日、熊谷刑務支所が、八月十五日未明に収容者の解放を行なつた。

爆弾、焼夷弾による被害も続出、刑務官、受刑者の死傷者も相次ぎ、同時に戦時状態にまぎれた多くの逃走者を出した。

逃走者は昭和二十年は全国で五百四十一名、うち逮捕者百三十一名、逮捕率二十四・一パーセントの低さであつた。ちなみに十九年の逃走者百四名、逮捕率四十一・三パーセント。終戦後の昭和二十一年が逃走者三百九十一名、逮捕率四十三・四パーセントの数字が出ており、いかに昭和二十年の敗戦の年は逮捕率が悪

かつたかがわかる。

尾形玉江の場合も、この戦時の混乱に助けられたものではあつたが、なによりも、一ノ瀬圭吾への思いがすべてのものに勝つた。

いつか辿つた道筋を、熱い思いを胸にひたすらに、玉江は北へと向う。一ノ瀬圭吾が一人で遅しく生き抜いていてくれることを玉江は願つた。

車窓を過ぎる風景でさえ、早く去ってくれることを玉江は心に念じていた。

4

『但州生野銀山は天文十一年(五四二)壬寅(みずのえとら)二月上旬に城山の南表に銀石初めて堀り出し蛇間歩(じゃまふ)と号す。然るに里人は是を堀出すとゐえども、銀に成す事を知らず。然る所に、石州の人来り此石を求めて、石州に於て吹くところに大分銀あり則(すなは)ち此もの石州より金堀下財坑夫、金吹製練業者を語らひ来て、今の御立山官林の内、所々に間歩坑を開く。山神(当時才地区に鎮座)の上より東堂ヶ谷の内、白鷺間歩、伍右エ門間歩皆此節の山なり……』生野銀山記録史―

いまは裸木を岩肌之列ねた寒々しい山々が往時の面影をとどめるだけだつた。特に、若林山、白口坑のあたりはすたれにすたれ、露頭した岩山ばかりが低い空と接しているのが望まれるばかりであつた。

月明りの青さに照り返つた山肌は無気味でさえある。死の世界さながらにただ押し黙っている。

玉江は三度、この地にもどつた。

風もないので、一歩ごとの自分の吐く息だけがわしく耳についた。こゝろは逸はやり、くたくたに疲れているのに、足だけは前へ前へとすすんだ。

背に負つたりリクサツクの中には、なにがしかの食糧が入つていた。わずかながら現金も懐にはある。

途中、百姓家に寄り、生卵を二個買った。気が急いでいるのにその百姓家の庭先で花を開こうとしている五分咲きの梅の花を二枝手折ってもらった。

花が開けば病いの床にも春の匂いを届けてくれると思った。これまで手近かに花があつても見向きもしなかつたのに、玉江はやさしい心根を持った女になった。

圭吾のことが気になる女になっていたのだ。

あと数分もあれば坑口内に入ることができた。

白口坑の表側はバリケードが組まれ通行不能の状態になっていたが、密窟坑の間道口から玉江は坑道内に入った。

あの湯泉に行く時に通る二枚岩の下の暗い穴である。お互いを確認し合うために坑内に入る時は岩壁に合図を送ることになっている。

とんとんと二度叩く。

この廃坑を出てから十五日間、玉江と圭吾は、別れの毎日を強いられた。

中程まですすみ、もう一度、とんとんと岩壁を拳で打つ。何の返事もない。

どこに圭吾はいる？圭吾は生きているのか？

不安な思いになり、玉江はふーと深い息を吐いた。なお急ぎ足になる。息をはずませた。

あの岩室の直下の縦穴の、近くで、圭吾とは、あの時、別れた。すでに生きているなら、玉江の足音は聞えているはずだった。

「な、帰ってきたでえ、うちや、圭吾はん、玉江や。どこに、おるんう」

声を出してみる。返事はなかった。

寝藁を持ち込んだ気配のある岩穴の一つに辿り着く。圭吾の姿はない。

この場所で、彼はあの時、熱病にうなされていたのだ。圭吾は体が恢復し、食糧調達に外に出ているのか。それとも、山奥の湯泉にでも行き、療養につとめているのだろうか。

岩室に通じる石蓋を押し上げ、神の岩穴に入ったがそこでも圭吾の姿は見当らなかった。

岩穴の隅を手で探つてみる。

そこには圭吾の持物が置いてあった。藁や干草の寢床の上に玉江が与えた作業衣の上下が捨ててある。

この盗んで来た国民服の上下を、玉江がここを出る時、圭吾は着ていた。なお探ると、軍服の上下と、軍帽、ゲートル、銃剣を装着してあった帯革がなくなっていた。

軍服に身を固め、圭吾は一体どこに行つたのか。

「圭吾はん、圭吾はん、あんたどこにおるんや、返事しい」
岩室の仕掛け扉を押し、玉江はまた暗い坑道を手探りですすむ。いつも圭吾がそばにいていた懐中電灯が、最初の寝藁の場所になかったことをふと思い出す。

圭吾は確実にこの坑道を歩み、なんらかの行動を起していた。歩けたということに、玉江は一婁いちろの望みをつないだ。

「圭吾はん！」少し力強く叫んでいた。

どこからか圭吾の声がしたような気がした。

空耳なのだろうか。耳を澄ますと、地底から、ぽとんと落ちる水滴の音が聞えた。

圭吾の声に聞えたのは風鳴りの音だった。犬走りの竪穴の上まで来ていた。ひゅっひゅつと冷たい風が吹き上げてきた。玉江の髪を風が撫で上げた。

あの、直下の穴につながる氷の室から、誰れかが呼んでいる。葉室勝が心変りした玉江を自分の元に引き寄せようとしてもしているかのようなだった。

玉江は雁木にとりつき竪穴を下った。

急に空気が冷えたものになった。

わずかに淡い光が行く手の闇にこぼれていた。

氷の穴にやっと辿り着く。

氷のつららが、青白い光をはね返していた。

じつと眼を凝らす。吐く息が白くなった。

と、黒い影が眼の前でゆつくりと揺れていた。

玉江は息を詰めて、その視野をかすめとつた物体を

凝視した。一ノ瀬圭吾は首を吊っていた。

「圭吾……あんだ…」

玉江は絶句し。唇がわなわなと震えた。

その場にへたり込む。玉江は両眼だけを一杯に見開いていた。なぜなのか？軍服姿に身を固め、氷の室の岩の突き出た角にゲートルを巻きつけ、自らでその輪に首を懸けていた。わずかに揺れている棒状の死体を玉江はじつと見詰め続けた。

片方の脚だけにゲートルが巻かれている。

いや、軍服のボタンさえちゃんとはめられぬふしだらな兵隊だった。胸のボタンもズボンの前合わせのボタンも掛けられていない。軍靴も片足だけしか紐は結ばれていなかった。腰の帯革に飾られた着剣だけが、やつと、彼を軍人らしく見せた。

「あの話に聞いたことのある菅原二等兵の亡霊が一ノ瀬圭吾には取り憑いたのか？」

思わず、玉江が呟く。とすれば、彼もまた気が狂い、絞首台に上る時の、あの滑稽（つけいな）菅原二等兵のゼスチャーゲームを演じてから、ゲートルの輪に首を懸けたのか？青白い光に焙あぶられた一ノ瀬圭吾の縊死体は、ただ、風に揺すられているだけだったが、

どこか、安らかに見えた。すべての苦痛を忘れている。

ただ、玉江には一人で死んだ圭吾の淋しきのことが思われた。急に圭吾が哀れになった。

「あんだ、あほやな。うちが帰って来るのを待つてられへんかったんか。なあ、一人で辛かったやろな…」

圭吾のものの言わぬ姿に語りかけた。愛しそうに冷たくなった死体の腰のあたりを抱き取った。

もう人肌の暖かさは伝えてはこなかった。

踏台代りになっていた岩塊（いわくれ）が崩れ落ちた。

玉江は岩塊の上に足をつけ、棒状に硬直した圭吾の遺体を降ろした。玉江は死体を背に負った。

葉室の眠る岩窟に、圭吾を運んだ。

次に、岩壁に背をもたせているもう一つの死体、葉室

勝の横にそつと横たえてやる。そつと圭吾の冷たくなつた唇に、自分の唇を押しつけた。

それから手にして来た一枝ひとえだの梅を、二人の男のためにそつと岩床の上に置く。

春まぢかの馥郁おくいくたる梅の香を嗅いだ。

二人の男たちも、この甘酸っぱい薫りを胸一杯に吸っているのだと思つた。

「うちの体の中でな、二人とも生きてんやでえ。うちはずとも悲しいことなんかあらへん。な、これからは三人一緒に、ここで暮らすのや……」

玉江に情を通じ合つた男と女、わかり合えるものがあるに違ひなかつた。いつまでも…玉江は男たちに語りかけていた。それは、ほかの誰れにも聞きとることの出来ない玉江だけの呟きの声だつた。

昭和二十年八月十五日。

日本は終戦の日を迎えた。この日の神戸地方の空は、雲が厚かつた。わずかに夏の陽がもれることはあつたが、盛りの夏にはほど遠い打ち沈んだ空模様だつた。

空の雲は、黄塵を含んでいのか薄汚れた色を呈していた。八月に入ってから敗戦の日まで十一日間、神戸市はB29の空爆にさらされた。その間、四万トンの焼夷弾が落されたという。地上のあらゆるものが焼きつくされ、その煙が去りやらず、この日も宙空にとどまつていたのである。

〈昭和二十年八月十七日〉

生野の山をおり、地元の駐在所に玉江は自首して出た。北神拘置所に復監させられ、取調べののち、和歌山の女子刑務所に身柄を移管された。

いま、尾形玉江は妊娠六カ月目を迎えていた。

おなかの中には一ノ瀬圭吾の子供を宿していた。

束（つか）の間の蜜月だったが、小さな生命が息付いていた。一ノ瀬圭吾が遺した、たつた一つの愛の遺形かたみ）

だった。生む決心をしたのは、一ノ瀬圭吾の無念の思いが痛いほど玉江の胸に伝わって来たからである。

生野の山中では、とてものこと、母体を守ることは無理だった。安産を望むべくもない。

子供は刑務所内で生むことになる。

彼の意志どおりだとしたら、生れる子供は女の子とということになるのだが……。

そのあとには、苛酷な運命が待っている。

尾形玉江は女子死刑囚の一人であつた！。

（全巻 了）

「脱獄情死行」

＊原作の一部改訂、最終稿としました。